

神戸女学院大学における英語科教育法に関する考察

A Study on Teaching English Methodology at Kobe College

白井 由美子

SHIRAI Yumiko

神戸女学院大学文学部英文学科准教授

Department of English, School of Letters, Kobe College

shirai@mail.kobe-c.ac.jp

キーワード：教職課程、英語科教育法、模擬授業

Key words: teacher training courses, English teaching methodology, stage practice

1 はじめに

文部科学省が全国一斉に教職課程再課程認定を行うことになった。これは、2019年度から各大学の教員養成課程が教員免許状を与える資格があるかどうかを審査するものである。現在各大学ではこれに向けての準備が行われている。

この再課程認定の大きな特徴は、教職課程のコア・カリキュラムと外国語（英語）のコア・カリキュラムの見直しである。教職科目に関しては、道徳心を育てることや特別支援活動の必要性など、昨今の時代の流れに応じて設定されている。外国語（英語）のコア・カリキュラムについては、ここ数年に見られる中学校・高等学校の英語科教員の英語力の低下や2020年の東京オリンピックを契機にさらなるグローバル化を見据えての改革内容が盛り込まれている。

その中でも今回の見直しの影響を大きく受けるのは、小学校の外国語活動である。これは現在、小学校5、6年生に導入されている外国語活動を3、4年生に引き下げ、そして、5、6年生では中学校1年生程度の文法を学び、成績もつける正式科目にしようというものである。近隣のアジアの国々が早期に英語を導入し、TOEIC等の点数も伸ばしている状況をふまえ、この動きに対する賛成の声も多々ある。しかし一方では反対派の意見も根強く、平行線をたどっている。新聞等でもすでにこの改革案が発表されているが、実際には英語を教える資格を持っていない小学校の教員の声が反映されていないなど、詰めなければな

らない点はまだまだ残されている。

さらに、中学校での英語教育に対しても改革がなされようとしている。小学校における早期英語教育の導入と、「基本的には」英語で授業を行っている高等学校の現状を受けてのことである。つまり、中学校の英語の授業も「原則として」英語で行うという方向で検討がなされている。こういった一連の流れを受けて、大学の教員養成課程の見直しが行われることになったのである。

本学英文学科の教職課程は、開学当初より英語の教員を養成することにも力を入れてこられたタルカット先生やダッドレー先生の時代から築きあげられたものである。ここ数十年をさかのぼってみても、Bogard 先生、本城智子先生、原田園子先生という宣教師教員及び卒業生が、教職課程の核となる科目である英語科教育法を担当してこられた。つまり、伝統的な教育方法が脈々と受け継がれているのである。そのような由緒ある科目である英語科教育法を受講した学生は卒業後、中学校、高等学校において頼られる教員として活躍をしている。こういった諸先輩方に続く教員を輩出すべく、原田先生からバトンを受けて7年経った。このたびの再課程認定を機に、英語科教育法の授業を振り返り、さらに学生がこの授業を通して何を得たか、ここ5年間の彼女たちのレポートを見ていきたい。

2 英語科教育法

教職課程科目を履修している英文学科学生は、3年次になると英語科教育法Ⅰ、Ⅱ、Ⅲを履修する。Ⅰは前期科目、そしてⅠの単位を取得出来れば後期にⅡとⅢの履修が可能となる。しかし、英語科教育法Ⅰを履修するためには学内での成績審査があり、誰彼と履修が出来る科目ではない。この成績審査は学校の教員となるためのコースであることから、学内での英語の成績を重視して行われる。つまり、普段の英文学科の授業をきちんと受けることが出来ているかどうかが大変な要素となる。さらに、ここ数年文部科学省が教員の英語力について意見を述べていることもあり、2016年度生より TOEIC の成績も審査に加えることとした。このような英文学科独自の審査基準は筆者が本学学生であった頃より設定されており、これも本学の教職課程が常にある一定のレベルを保っている一因と考えられる。

次に、この英語科教育法で学生が学んでいる内容について述べる。Harmer の *How to Teach English* を使用して、英語科教育法Ⅰの授業では主に「教える」ということに理論の面から向き合っている。しかし、自分たちが受けてきた中学校・高等学校での教育と照らし合わせながら実践的な内容も導入して進めていく。そ

の中には4技能の教え方を始め、発音についての気付きや文法をどのように教えたなら効果的かなどということも含まれる。また、英語教育における指導方法の歴史を振り返り、現場に合ったよりよい指導法も考える。英語で書かれたテキストと、さらにプラス α の内容まで取り扱うため、学生にとってはかなり分量の多い授業内容となっている。

英語科教育法ⅡとⅢでは、中学校、高等学校の教科書を使用して、実際にレッスンプランを作成する。作成する過程では、教員との作成前のコンサルテーション、提出・返却時、及び、再提出・再返却時に個別指導を受け、よりよいプランを仕上げ模擬授業に臨むことになっている。各学年のレベル、特徴を考慮した上で、中学校では英語だけを使用したレッスンプランを、そして、高校でも英語を中心に使用したレッスンプランを作成している。使用言語が英語のみである中学校の授業展開は、本学独自のクルーメソッドを土台としたものとなっている。また、プランには概略だけを記すのではなく、教員の発言に対して生徒の発言も想定した台本形式のものを作成する。そこには教材として使用するピクチャーカードやフラッシュカードも記載され、どのような授業を展開するかが一目瞭然となっている。

レッスンプランの作成は2人ペア（または3人のグループ）になり、1つのパートに対して作成をする。使用教科書は中学校の場合は三省堂の *New Crown English Course I* を、そして高等学校では大修館書店の *Genius: English Communication I* を使用する。学生は作成したレッスンプランを使用して1人20分ずつ模擬授業を行う。その模様はビデオで撮影し、その後、各人が持ち帰り見返して反省文を書いてくる。模擬授業の時にはクラスメートが生徒役を行う。模擬授業を担当する学生の友達やゼミの担当教員、また1, 2年次教職課程学生なども来て授業に参加することもある。レッスンプランはペアで1つを作成しているが、一人一人が独立した授業を展開する。次に女学院独自のメソッドである中学校の模擬授業の展開について紹介したい。

3 模擬授業

授業は挨拶に始まり、Presentation <導入>、Check of Understanding <理解の確認>、Oral Practice <口頭練習> (Imitation and Repetition, Mechanical Drill, Meaningful Drill)、Consolidation <本時のまとめ>、Reading Practice <教科書の音読練習>、Homework <宿題>、そして最後の挨拶という流れになっている。

3-1 Presentation

Presentation の場面では、全て英語で進めるため、その時間の教えたい項目を取り入れた文章をどのように使うか場面を設定して紹介する。ピクチャーカードやレアリア（実物教材）を使用するなど、各自が工夫して本時のターゲットアイテムを導入する。いかに工夫するかによって生徒の反応も違ってくるため、ここは教師役の学生の腕の見せどころでもある。新しい文法事項を習うということは生徒にとっても負担になるため、単語は既習の物を使用するように注意する。学校以外の場所ですでに習った生徒もいる可能性があるため、そのような生徒だけが理解できる授業にならないよう、クラスの生徒皆が分かるように配慮する。

3-2 Check of Understanding

ここでは今の **Presentation** が理解できたかどうかをチェックする。しかし、授業を受けたわけではないので、確認は **WH-Question** で行うのではなく、**Yes** か **No** か、あるいは、簡単な文であれば、教員と生徒が一緒に言ってみる、という程度の確認方法となる。分からなくても生徒が不安な気持ちにならないように気を付ける。

3-3 Oral Practice

実際に声に出して練習を始める部分である。**Imitation and Repetition** では、初めて習う文を先生の発音をまねて実際に言ってみる。その際、難しい単語やターゲットとなる注意を促したい点は、少し大げさに発音するなど工夫をする。また、長い文は **Backward build up** を使い、文の後ろの単語から一つずつ増やしていきながら練習をする。このようにする方が、イントネーションが崩れないため、前から切っていくのではなく、あえて後ろから入って行く方法をとっている。さらに、疑問文とその答えとなる文の組み合わせを導入する場合は、簡単な答えの方から練習を始めるようにする。

繰り返して何度も練習が出来たら、次はドリルに移る。ドリルでは単語を入れ替えて文を作る練習をする。例えば **I play ~.** の定着をはかりたい場合は、**tennis, soccer, baseball** と球技の単語をいくつか用意しておいて **cue** として出し、それらの **cue** を出されたらその瞬間に単語を入れ替えて文を作るという練習を行う。瞬時に行うことによって、また何度も言うことにより定着をはかる。

単語の入れ替えのレベルですぐにその時間で習うべき文を言えるようになったその次の段階では、今度は全て自分でその文を作ることができるよう練習をする。その際、**presentation** で使用したピクチャーカードや実物教材等を示して生徒に文を作らせる。この文が疑問文に対する答えの文である場合は、教員が質問をして、答えの文を言わせるようにする。そうすることによって、答えの文

よりも難易度の高い疑問文を生徒は知らず知らずのうちに聞けることが出来、次の疑問文の **Imitation and Repetition** にスムーズに入っていくことが出来るようになるからである。

このような工夫をしながら口頭練習を進めて行くが、その際、先生と生徒でしていた練習を次第に生徒同士の練習に切り替えていく。つまり、先生のコントロールを少しずつ外していくように持っていく、だんだんと自分たちで出来るように導いていく。最終的には自分たちで習った表現を用い、自分のことを言えるようになることが目標であるため、このような形を取っている。先生のコントロールを外した後も、いきなり一人ずつに言わせるのではなく、まずはグループ同士で文を言わせ、そしてその後に個人にあてるようにと、ハードルを少しずつ上げていくように工夫する。

英語が苦手な生徒に対しては、間違えた場合もその一人の生徒だけの間違いとしてとらえるのではなく、クラスでもう一度練習をしてから再チャレンジの場をその生徒に与えるなど、連帯感を持って臨むようにする。

3-4 Reading Practice

教科書は本時で教えるべきことを口頭で練習した後にひらく。そのため生徒はすでにその授業での大切なポイントを理解した上で教科書の文字を目にすることが出来るため、日本語訳で確認しなくてもある程度内容を理解できる状態になっている。また、音声言語を重視して授業を進めてきたため、この段階で初めて文字を目にするが、スペルが難しくとも生徒は発音をきちんと出来るようになっている。

本文は会話文であることが多いので、先生が本文を2回読んで聞かせた後、先生と生徒がそれぞれの役になって音読練習を行う。生徒が読めるようになってきたら、クラスを2つのグループに分けてそれぞれのグループに役を与え読ませ、さらには2人の生徒を当てて皆の前で読ませるという作業を行う。最後にはもう一度クラス全員で読むようにして、指名されなかった生徒にも達成感を持たせるようにする。

3-5 Consolidation

このような口頭練習と教科書理解を経て、生徒が本時のターゲットとなる事項を習得したことを最後にもう一度確認する場が **Consolidation** である。ここでは一人ずつにはあてず、全体で言えるかどうかのチェックをする。先ほどの口頭練習の場面で当たらなかった生徒もいるため、再度、教室で言えるかどうか声を出して確認させることによって、家に帰ってから自信を持って復習に臨め

るようにと配慮している。ここで言えるようになれば、一人で家でも練習することも出来るレベルに達している。

3-6 Homework

最後に宿題を与える。これはその時間に習ったことを定着させるためのものでなければならない。そのためにはどのような宿題が良いのか、その宿題によって、どのようなことを学べるのか等をしっかりと考えて出さなければならない。学校の外で英語を習っている生徒だけが出来るようなものであってはならない。

こういった流れで作成したレッスンプランを用いて、学生は模擬授業に臨むのである。1人20分の模擬授業である。そのため時間配分に注意し、もしも予定の内容が早く終わってしまった場合でも、20分最後まで授業をする必要がある。そのため、そういった場合には何をすべきかを事前に考えて臨まなければならない。宿題を述べた直後に20分の終わりのベルになるのが一番良い。

細々としたことや、時間配分にも気を配りながら行った模擬授業を終えた後は、クラスメートと、カメラ撮影のために参加している4年次学生から良かった点と改善点に関する批評をもらう。次週、本人は反省文を提出し、それをもとに教員との個別の話し合いを持って一つの模擬授業に対する作業が終了となる。

高等学校のレッスンプラン作成作業においても、中学校と同じ流れで臨むことになる。しかし授業の内容は、中学校のように決められたメソッドに則って行うのではなく、流れはあるが、各自に任せる部分も大きい。そのため模擬授業では、それぞれの特徴がみられ、学生はクラスメートの模擬授業から学ぶところもかなり大きい。

4 英語科教育法の授業を受けて

模擬授業の準備のため、学生はかなりの時間を費やしている。指導案を作成する過程でもそうであるが、作成し終わって模擬授業前の立稽古の時にも教室の黒板の前で実際に20分間通して練習を行うなど、学生は念入りに準備をして模擬授業に臨んでいる。岡田山ロッジに模擬授業前日に泊まり込んで練習を行っていたペアもいる。そこまで入念に準備をして臨んだ模擬授業であるが、学生はこの模擬授業や前期の理論の授業から何を学び、教育実習でどのようにそれを活かしたいと考えていたのか、アンケートからの言葉を抜粋したい。

4-1 英語科教育法を受講して鍛えられたこと、得たこと

- ・生徒が楽しいと思える授業づくりに対する考え方

- ・新しい単元の導入の方法
- ・個別指導、自主的な練習、クラスメートとの意見交換を通して、互いに良い授業に向けてのスキルアップ
- ・模擬授業の達成感による教育実習への気持ちの整理
- ・どう教えるのがわかりやすいか考える姿勢
- ・授業で使用する教材作成の仕方
- ・大きい声で授業をすること
- ・人前に立つ度胸を持つこと
- ・自分が得意な英語を自分でわかるだけでなく、人に教えることが出来るようになること
- ・英語を教える際の手順、注意点、コツとそれらの実践
- ・教えるという力
- ・コミュニケーションをとる力
- ・英語に関する知識
- ・どのように説明をすればうまく生徒に伝わるのか
- ・生徒にとって何が理解しにくいのかを考えるということ
- ・教師として教壇に立てる資質
- ・教授法や教育に関する知識
- ・学業を通して頑張ったという証
- ・礼儀
- ・高校生に教えるにあたって問題のないレベルの英語力
- ・生徒に教えるためのアプローチの仕方
- ・様々な英語の指導法
- ・生徒によりわかりやすく自分の授業を理解してもらうためにはどうすればよいかを考える姿勢
- ・文法や単語をふくめた内容の英語での指導の仕方
- ・授業内活動の企画の仕方
- ・教師像についての考察
- ・生徒に合わせた授業を行うように出来るようになるために、何を見て、どのように対応すればよいのかということ
- ・生徒にわかりやすい授業
- ・写真や実物を用いた授業の展開方法
- ・生徒が声を出しやすい cue の出し方
- ・生徒の立場になって授業を考えるということ
- ・教師であるためには何が必要か
- ・楽しく、わかりやすく、効果的に英語を人に教えること
- ・緊張感を持った授業
- ・発音

- ・リズムよくドリルをすること

4-2 回答を受けて

伝統的に「厳しい」と言われる本学の英語科教育法であるが、学生はその授業においてたくさんの事柄を学んでいることが分かった。主には生徒の立場に立ち、いかにわかりやすい授業を展開できるかということをしつかりと考える姿勢を身に付けているようである。このことは、平成 27 年 6 月に公表された文部科学省がまとめた『生徒の英語力向上推進プラン』¹⁾に見られる事柄に通じるものである。つまり、その中の平成 23 年度から行っている「英語力調査」によると、英語が好きではないと答えた生徒は半数以上にのぼり、さらにはそのように答えた学生は英語の成績が芳しくないことがはっきりとした。また、そのような生徒は、将来英語を使った学問や仕事に進もうとしていないこともわかった。中学校、高等学校共に 50 パーセント以上の生徒が英語に対して苦手意識を持っている結果が出た以上、全員が英語を得意科目になる必要はないが、まずは英語を得意科目に変えていくことが教員の果たすべき役割と言えそうである。そのためには何よりもわかりやすい授業を行うことが大切だと思われる。

さらに、広野他 (2004)²⁾によると、教育実習生担当の中学校・高等学校の教員が教育実習生に望んでいることとして「生徒を理解しようとする姿勢」や「英語での授業」が挙げられた。生徒に寄り添い、英語を使ってわかりやすい授業を展開しようという本学学生の姿勢は教育実習先で高い評価を得られるものではないかと思われる。

では、実際にこのたびの再課程認定の基盤となっている中学校・高等学校教員養成コア・カリキュラムでは、どのようなことが教員養成課程の学生に望まれているのであろうか？『「英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究事業」平成 28 年度報告書』³⁾には中・高等学校教員養成コア・カリキュラム（試案）の全体目標として以下の記述がある：

- ・生徒の4技能にわたる総合的なコミュニケーション能力を育成するための授業の組み立て方及び指導・評価の基礎を身に付ける。
- ・生徒の理解の程度に応じて英語で授業ができる指導力を身に付ける。
- ・CEFR B2 レベルの英語力を身に付ける。

2 つめに書かれている「生徒の理解の程度に応じて」という部分は、まさに「生徒の立場に立って」という意味に解釈できる。また、「英語で授業ができる」という個所についても、中学校のレスンプランは本学のクルーメソッドを用いて英語で作成されるためこの目標を達成している。1 つめの目標に関しても授

業の組み立てと指導については、模擬授業のLESSONプラン作成時より構想を練った上で臨んでいるため満たしている。3つめのCEFR B2 レベル⁴⁾という英語力は、英検準1級レベルであるが、この英語力に関しても、英語で授業を進めるため、この形式の授業を受けた生徒は自然と英語力が身につくようになる。

このように見てみると、本学の英語科教育法の授業は伝統的な内容を踏まえて展開しているが、古いどころか文部科学省よりも先を見越した内容を提供していたと言える。

では、学生はなぜ神戸女学院大学の英語科教育法を受講することにより、「生徒の立場に立った授業」の大切さを感じたのであろうか？「愛心愛隣」を永久標語とするこの神戸女学院で学生生活を過ごしていること、また、卒業生教員がゲストスピーカーとして語る話の中に、教員として自分の生徒を常に思い行動している様子を聞く機会があること、模擬授業を通して協力し、相手を思うことを学ぶこと等、色々なことを経験することにより教員としてどのような働きが出来るかを考える姿勢が自ずと身に着いたからだと思われる。

学生は生徒のために何が出来るかをLESSONプラン作成時に真剣に考え取り組んでいる。「写真や実物を用いた授業の展開方法」を身に付けたという文言が挙げられているが、これは生徒にどのように興味を持たせる presentation が出来るかを考えてのことである。また、「生徒が声を出しやすいcue の出し方」というのは、しっかりと生徒に声を出させることにより定着をはかりたいという気持ちの表れである。そして、「生徒にとって何が理解しにくいのかを考える」という回答は、型にはまったプランを作成するのではなく、生徒の躓きやすい点も考えて授業を組み立てていくということであり、まさに生徒のためという姿勢が伝わってくる文言である。

5 おわりに

このような姿勢を身に付けた英語科教育法を履修した学生は今後に向けて「英語を知りたい、理解したいと願う人々の役に立ちたい」、「子供の様々な特性を知り、もっと詳しく研究したい」という気持ちを持っている。このことは教育実習先での学びへの期待でもある。学生の教育実習での成長の様子は今後分析を進めていきたい。

文献と註

- 1) 文部科学省 『生徒の英語力向上推進プラン』

http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/__icsFiles/afieldfile/2015/07/21/1358906_01_1.pdf

- 2) 広野威志・山崎朝子・茂岡千利世・酒井志延・久村研 「教育実習の受け入れ側の意識に関する調査」 JACET 第1回関東甲信地区大会口頭発表 2004
- 3) 東京学芸大学 『英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究事業 平成28年度報告書』 2017
- 4) ブリティッシュ・カウンシル 『「ヨーロッパ言語共通参照枠(CEFR)」と「英語力検定試験」』

<https://www.britishcouncil.jp/sites/default/files/pro-ee-lesson-level-cefr-jp.pdf#search=%27CEFR%27>